

ら確実な後食痕を確認した(図3)。また、ブドウ科植物には注意したつもりだが、本属のものと思われる後食痕はツタに残されたわずかなもの以外には、まったく見つからなかった。なお、ここでは成虫は1頭も発見できなかった。

本調査は、自然公園法に基づく動物捕獲許可および御蔵島村条例による許可を得て行った。なお、三宅島については村条例による採集規制は無いが、観光地の大路池周辺は国立公園特別保護地区に含まれているので、採集に訪れる時は留意されたい。

引用文献

高桑正敏・岸本年郎・岸田泰則・須田真一, 2011. 御蔵島におけるシラホシカミキリ属2種の後食植物. さやばねニューシリーズ, (1): 18-21.

(高桑正敏 250-0031 小田原市入生田499
神奈川県立生命の星・地球博物館)

【短報】晩秋～初冬におけるフタイロミゾキノコシバンムシの西丹沢からの記録

シバンムシ科フタイロミゾキノコシバンムシ *Mizodorcatoma pulcherrima* Sakai は本州・四国・九州・対馬に分布する美しい種である。一般にまれな種とされており、神奈川県ではこれまで横浜市金沢区(久保・渡, 1998)と藤沢市(堀井, 2007)から知られている(記録上の分布東限と思われる)。前者では6月に横浜市円海山地域で1頭が採集され、後者では3月にサルノコシカケ状の菌類中にいた多数の幼虫が4月下旬から5月上旬に羽化脱出したという。筆者らの一人、木村は晩秋～冬期に西丹沢においてサルノコシカケ類のマンネンタケ科マンネンタケ属に属するオオミノコフキタケの下面よりいくつかを見出したので報告する。

3頭採集(神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵)ほか数頭目撃, 神奈川県足柄上郡山北町玄倉丹沢湖ビジターセンター(標高約340m), 30. XI. 2011, 木村洋子; 1頭目撃(図1), 同, 15. XII. 2011, 木村洋子。

このオオミノコフキタケ(図2)は林縁に生育するアカシデ(カバノキ科)生木の幹に付着していた(図3)。

本種の寄主菌類としては、これまでオオミノコフキタケと同属のコフキサルノコシカケが知られており、長崎県で3月に持ち帰ったものから5月下旬に多数が脱出した(和田ほか, 2001)。また、Sakai (1979)も本種の原記載のタイプシリーズに、鹿児島県における7月下旬の野外採集個体とともに

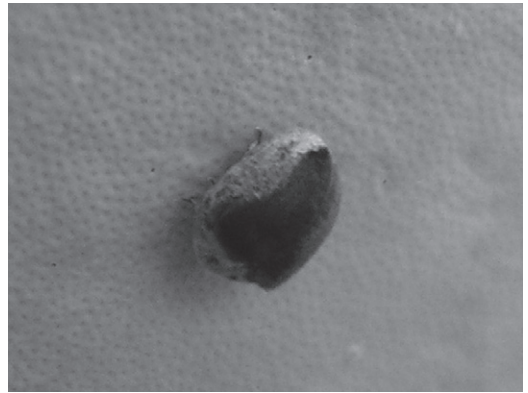


図1. オオミノコフキタケ下面にいたフタイロミゾキノコシバンムシ。

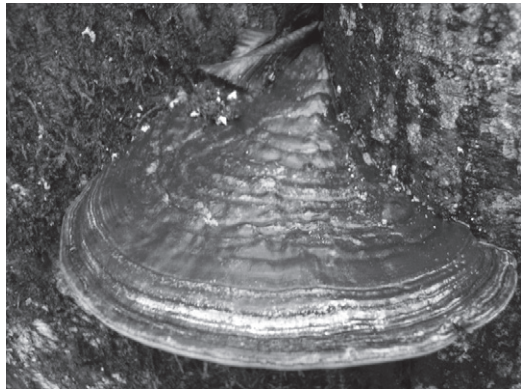


図2. フタイロミゾキノコシバンムシが発見されたオオミノコフキタケ。



図3. オオミノコフキタケの生育状態。

に、愛媛県(3月)と対馬(5月)から採集したサルノコシカケ類からともに6月に脱出した多数の個体を含めている。今回の西丹沢における知見と堀井(2007)、和田ほか(2001)、Sakai(1979)を考慮すれば、本種はサルノコシカケ類(とくにマンネンタケ科マンネンタケ属 *Ganoderma*)を寄主菌類とする狭食性種と言えよう。さらに和田ほか

(2001), 堀井 (2007), Sakai (1979) の報文からは、越冬態は少なくとも幼虫世代でもなされること、新成虫は晩春～初夏に出現することが考えられる。秋期の採集例を知らないが、新成虫がこのまま夏を越して晩秋期以降まで生存する（つまり年1回発生）のか、あるいは初夏～盛夏に交尾・産卵活動を行い、晩秋期にも新成虫が出現する（つまり年2回発生）のか、興味が持たれる。

末尾ながら、寄主の菌類を同定してくださった神奈川キノコの会会長の城川四郎氏、和田ほか (2001) の別刷を恵与くださった今坂正一氏にお礼を申し上げる。

引用文献

- 堀井邦弘, 2007. フタイロミゾキノコシバンムシが神奈川県藤沢市で多数発生. 月刊むし, (442): 17.
久保浩一・渡 弘, 1998. 神奈川県初記録の甲虫3種. 神奈川虫報, (123): 39.
Sakai, M., 1979. Studies on the Anobiidae (Coleoptera) from Japan and neighboring countries II. Four new Japanese species. Trans. Shikoku ent. Soc., 14: 131-139.
和田義人・今坂正一・野田正美・青木良夫・山元宣征, 2001. 金毘羅山の甲虫目録. こがねむし, (65): 19-57.

(木村洋子 258-0202 山北町玄倉 515 県立丹沢湖ビジターセンター)
(高桑正敏 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館)

【短報】新潟県佐渡島のカミキリムシ2種の記録

新潟県佐渡島のカミキリムシ科については、小池 (1967) によって 108 種の記録がまとめられたが、その後も、多くの追加種が確認されているという (中林博之氏 私信)。筆者らは従来、同島から記録のなかった下記の2種のカミキリムシを確認しているので、佐渡島初記録として記録しておきたい。

キボシカミキリ *Psacothea hilaris hilaris* (Pascoe, 1857)

1♀ (図 1A), 新潟県佐渡市林道小佐渡線 (小佐渡林道), 14. VIII. 2011, 柴田採集; 1♀ (図 1B), 同, 27. VIII. 2011, 柴田採集。

林道脇を飛翔中の個体を確認した。写真からもわかるとおり、前胸背側縁の黄白色の縦帯、上翅の斑紋、色彩などは、西日本型と東日本型の中間の特徴を示した個体である。

本種は、本土側の新潟県内では、1958 年頃まで新津市でたまに見かける程度であったが 1970 年代に入って急増して県北部においても普通に観察で

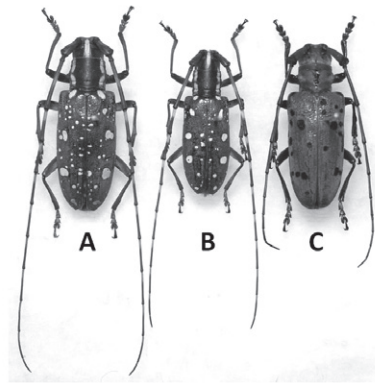


図1. 新潟県佐渡島のカミキリムシ2種. A, キボシカミキリ♀; B, 同; C, ホシベニカミキリ♀.

きるようになり、7月中旬から12月上旬まで成虫が見られたと言う (小池, 1982)。このように繁殖力が高い優占種が、今まで佐渡島内から発見されていなかったことから、近年になって本種がクワやイチジクなどに伴って島内に持ち込まれた可能性が考えられる。

ホシベニカミキリ *Eupromus ruber* (Dalman, 1817)

1♀ (図 1C), 新潟県佐渡市大佐渡スカイライン (妙見キャンプ場跡付近), 9. VII. 2011, 柴田採集。

佐渡島の内陸部、標高 900 m ほどの地点で、下草に止まっている個体を確認した。本種の寄主植物として知られているタブノキの島内における自生域は、大佐渡外海府 (北部北側の海岸沿部) を除く海岸沿とされており (石澤, 2008), 採集地点の周辺には見られないことから、南部沿岸から移動してきたか、あるいは他のクスノキ科の植物を利用していただけではないかと考えられる。

末筆ではあるが、佐渡島のカミキリムシ全般についてご教示いただいた新潟県の中林博之氏と、キボシカミキリについてご教示いただいた東京大学森林動物学研究室の深谷 緑博士に心からお礼申し上げます。

引用文献

- 石澤 進, 2008. 植物の分布とその特殊性. 佐渡島環境大全 (佐渡市環境副読本指導書), 28-47. 新潟県佐渡市.
小池 寛, 1967. 佐渡島の天牛類. 佐渡博物館館報, 第 16 号, 4-16. 佐渡博物館.
小池 寛, 1982. カミキリムシ科. 本間善治監修, 新潟日報事業社出版部 (編), 新潟県昆虫図鑑 (下), 311 pp.

(柴田直之 952-0202 佐渡市栗野江 1417-4, 203)

(日下部良康 224-0013 横浜市都筑区すみれが丘 21-12)